

不断の改善で推進する 生徒主体の 新教育課程

いよいよ高校の新学習指導要領の実施が、年次進行の形でスタートしました。2022年度入学生は、中学校生活のうち約2年間をコロナ禍の中で過ごし、また、GIGA スクール構想の前倒しにより、「1人1台端末」の環境で学ぶなど、今回の学習指導要領の改訂の背景にある、社会の変化の激しさを身をもって実感してきたことと思います。

そのような経験をしたからこそ、生徒も、新学習指導要領が新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指していることに共感し、それを実現する新教育課程に期待を膨らませるのではないのでしょうか。全国の先生方がそうした期待に応えていかれるよう、今年度の本誌の特集では、新学習指導要領に基づく教育実践を定期的に取り上げていきます。

初回は、新教育課程の実施に臨まれる現場の先生方へのメッセージの発信からスタートいたします。ぜひ、ご覧ください。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 メッセージ

自らの生き方を選択できる力を育むため、生徒を主語に教育活動を展開する
独立行政法人教職員支援機構 理事長 荒瀬克己

P.8 実践事例1 千葉県立千葉北高校

徹底した議論を通じて教師間で方向性を共有したことが、
ルーブリックの作成や教育活動の改善を進める土台に

P.12 実践事例2 静岡県立静岡東高校

「総合的な探究の時間」で資質・能力を育む指導と評価を模索し、
その経験を新教育課程での教科指導に生かす

P.16 実践事例3 広島県立^{かなべあさひ}神辺旭高校

資質・能力の育成を目指し、ルーブリックに基づいた
指導と評価の改善をICT活用と互見授業で推進

P.20 本特集のテーマのnext 実践事例1～3の学校の代表者による座談会

新学習指導要領下で目指すべき授業と学習評価を
実現するために必要な校内体制とは

千葉県立千葉北高校 進路指導主事 和泉雄介 / 静岡県立静岡東高校 教務主任 中上明仁
広島県立神辺旭高校 主幹教諭 徳本孝治

自らの生き方を選択できる力を育むため、 生徒を主語に教育活動を展開する



独立行政法人教職員支援機構 理事長

荒瀬克己 あらせ・かつみ

京都府・京都市立堀川高校長、京都市教育委員会教育企画監、大谷大学教授、関西国際大学学長補佐などを歴任。現在、中央教育審議会副会長、初等中等教育分科会長を務める。2021年1月に出た『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の取りまとめに尽力した。

いよいよ2022年4月から、年次進行の形で高校の学習指導要領が実施される。その理念を実現するために、管理職やミドルリーダーが発信すべきメッセージ、講ずるべきアクションはどのようなものか。今回の学習指導要領の改訂に携わった荒瀬克己先生に、学習指導要領に関する発信を続けてきたVIEWnext編集部統括責任者の柏木崇が聞いた。

在り方生き方を考え、
自ら選択・実行する力を育む

柏木 まずは、「資質・能力の3つの柱」「カリキュラム・マネジメント」など、新しい学習指導要領における重要な事項のすべての基盤となる考え方として示されている「社会に開かれた教育課程」について、改めて確認できればと思います（図1）。

荒瀬 選挙権年齢が18歳となり、2022年4月からは、成年年齢が20歳から18歳に引き下げられることを踏まえると、「社会に開かれた」という言葉は、高校にとつ



VIEWnext 編集部
統括責任者 **柏木 崇**

年間100人以上の高校教師に取材をし、本誌及び講演やワークショップ等を通じて、現場の実践を始めとする教育情報と、これからの学校教育のあり方を問うメッセージを発信している。

てはとても重いものです。

「社会に開かれた教育課程」とは、私たちが今まさに目指している持続可能な社会、その担い手として必要な資質・能力の育成を生徒に保障する教育課程であり、その実現のために社会と積極的に連携する教育課程と言えます。変化の激しい社会の中で、他者とかか

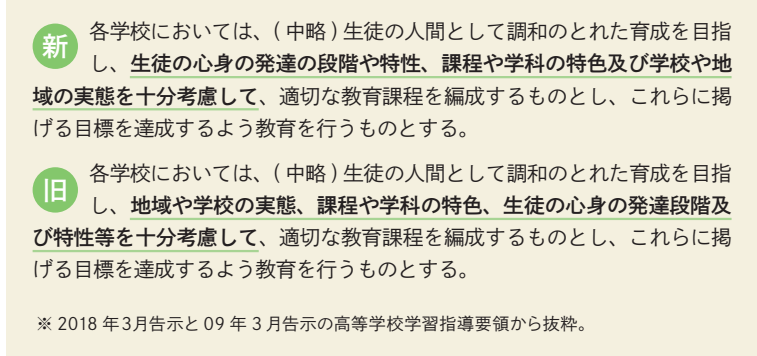
※プロフィールは、2022年3月時点のものです。

不断の改善で推進する 生徒主体の新教育課程

図1 学習指導要領改訂の方向性



図2 新・旧学習指導要領における第1章総則第1款1の比較



わりながら、自分はどうのように生きていきたいのか。そうしたことを考え、生き方を自ら選択・決定して実行していける力を育む教育課程が求められるのだと思います。したがって、地域との連携も、地域の活性化といった限定的な目的のために行うのではなく、生徒がどのような資質・能力を身につけるための連携なのか、生徒を主

語に考えなければいけません。柏木 「地域連携」をテーマとした『VIEWnext』高校版2021年12月号の特集でも、学校と地域が互いの連携の目的をしっかりと共有すれば、生徒の資質・能力の育成につながる連携を実現させることができると、実践校の先生方がおっしゃっていました。荒瀬 「社会に開かれた教育課程」

を実現するためには、教師も社会とつながる必要があります。ご自分の専門分野が、生徒が社会を生きる中でどう活かされるか、あるいは、これからの社会を生きる生徒にとってどのような意味を持つものであるか、こういった視点に基づいて、ご自身で、また、同僚と話し合っ、考究していただくことが、生徒が生きるための、も

この見方・考え方を養うことにつながるでしょう。

生徒を主語に据えることが
教育課程編成の前提

柏木 先ほど、荒瀬先生のお話の中に、「生徒を主語に」というキーワードが出てきました。「生徒を主語に」とはどういうことか、教えてください。

荒瀬 新学習指導要領と旧学習指導要領の第1章総則第1款1を比較してみると、分かりやすいかと思いますが（図2）。新学習指導要領では、教育課程編成においては、まず生徒の心身の発達の段階や特性を考慮することを求めています、子どもに視点を置いた記述になっています。何よりもまずは生徒の現状を見ようという呼びかけであり、新学習指導要領の大きな特徴だろうと私は捉えています。

また、新学習指導要領には、初めて「前文」が設けられました。前文には、学習指導要領の理念が示されていますが、私が特に注目しているのは、「これからの学校

には、(中略)一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である」という記述です。生徒

が自分のよさや可能性を認識できるようになることが、教育課程編成の大前提だという非常に重要な記述だと思えます。

柏木 新学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた科目として、「公共」や「情報I」などの多くの新たな科目が設置されました。そのため、教育課程の編成に苦慮された学校も少なくなかったようです。

荒瀬 現場の苦勞はお聞きします。そうして編成された教育課程ですから、一人ひとりの生徒が自分のよさや可能性を認識できるこ

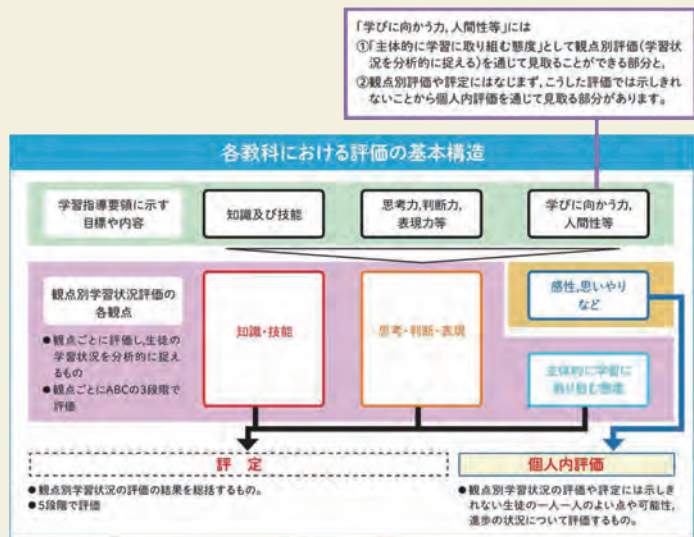
となど、学習指導要領の趣旨の実現に向け、校内で目標を共有して進めていただきたいと思います。

学校の生徒に必要な「学力」を追究する

荒瀬 よさや可能性は、周りがその人に気づかせることが大切です。自分のよさや可能性に気づかせてもらうことで、次第に自分でも自分のよさや可能性に気づけるようになり、他者のよさや可能性への理解も進むのではないでしょう。授業等での協働も、そういったことにつながっていくことが重要だと思えます。

生徒が自分のよさや可能性に気づけるようになるためには、教師の授業の進め方が重要になります。例えば、教師が基礎的な事項や見方・考え方をしっかりと伝える。その後は、生徒が自分の興味・関心を基に主体的に学んでいけるように、学びを自己調整するような問いかけを教師が行う。そのためには、この生徒にとってどういう学びが必要か、生徒が望む生き

図3 学習評価の基本構造



*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編」を抜粋して掲載。

方や在り方を踏まえて、ともに考えることになるでしょう。そうした教師の支援を受けながら、自ら学ぶことを通して、生徒は自分の存在を肯定的に捉えていきます。

一斉授業で教科書を最後まで終わらせることを優先するのではなく、一人ひとりの生徒にどのような学びが必要かを考え、自ら学ぶように背中を押す支援を充実さ

せることが、生徒を主語にした授業への転換です。

柏木 学校によって、生徒の希望進路や高校入学までに習得している学力は様々です。自ら学びに向かっているようにするために、最低限身につけるべき知識・技能や各教科等の見方・考え方はどのようなものか、育成を目指す資質・能力とひもづけながら明らか

不断の改善で推進する 生徒主体の新教育課程

にしていく必要がありますね。

荒瀬 その通りです。「基礎学力」というけれども、自校の生徒にとってそれはどのようなものなのか、各校で考えることが重要です。私が校長を務めた京都市立堀川高校では、教科の力だけでなく、探究する力も基礎学力です。基礎学力についても、スクール・ポリシーの中で設定し、生徒、保護者と共有することが必要だと思います。

生徒に自分のよさや可能性に気づかせる評価を

柏木 生徒を主語にした授業では、一人ひとりの生徒に対する教師のかかわりがこれまで以上に重要になりますね。

荒瀬 教師のかかわりの中で、生徒に自分のよさや可能性に気づかせることができる最大のチャンスが評価です。通知表に記載する評価や評定だけでなく、日常的な声かけも、生徒を応援する大切な評価です。「こんな考えを持ってすごいね！」と認めることはもちろん、「どうしてそのように考える

ようになったの？」と尋ねることも、生徒の成長を評価することもできます。ルーブリックについても、作って終わりではなく、それが生徒を励ますものになっていくかどうか、検証を続ける必要があります。その際、複数の教師、そして生徒もかかわりながら、一緒に評価規準を考えていくことで、自校の生徒の実態に即した評価が実現するはずです。

柏木 「学習評価」をテーマとした『VIEWnext』高校版21年10月号の特集で紹介した「標準ルーブリック」の開発の取り組みのように、生徒の成果物を基に自校の生徒に合った評価を追究する学校も出てきました。一方、知識・技能の習得が苦手で、評定ではよい結果が出にくい生徒が次の学習に向かえるようにするためにはどうしたらよいのか、悩んでいる先生方も多くいらっしゃいます。

荒瀬 人が人に対して行う評価は、そもそも完全ではありません。評定ではよい結果が出にくい生徒に対しても、「評定には表れないよいところが、あなたにはたくさ

んある」「あなたの持っているよいところを発揮できるように、授業、評価の場を考えていきたい」と生徒に視点を置くことで、生徒を主語にした評価になっていくのではないのでしょうか。

柏木 学習評価の基本構造の中に明記されているように(図3)、いわゆる個人内評価として、思いやりや人間性といった、評定には結びつかないかもしれないけれども、他者とかかわりながら持続可能な社会づくりを担うために欠かせない資質・能力を見取り、伸ばしていくことが求められるのです。授業のあり方、そして評価の考え方も、生徒を主語にバージョンアップさせることが大切なのだと改めて実感しました。

荒瀬 そのためにも、教師の心理的安全性を担保することが不可欠

です。心理的安全性が担保されていないと、例えば同僚に相談したり、不安を打ち明けたりすることもできず、バージョンアップに対しても後ろ向きになってしまします。それは必ず、生徒にも影響するでしょう。先生方の心の余裕の保障を、学校だけでなく、社会全体で考えていくべきです。

これからの学校は、いつ、どのような教育活動で、どのような資質・能力の育成を目指すのかを整理し、その成果や課題を評価・検証するカリキュラム・マネジメントの視点が求められます。生徒の資質・能力の育成につながるかどうかという視点、すなわち生徒を主語に教育活動の優先順位をつけていき、カリキュラムを精選していくことで、先生方の負担を減らすことが必要です。



一人ひとりの生徒が
自分のよさや可能性を
認識できるようにすることが
教育課程編成の大前提です